

葬送・祖先祭祀における嫁役割—分析視角としての検討

○森 恭子 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科)

嫁は、他人でありながら「家のもの」としての振る舞いを期待される存在でもある。しかし、現代において嫁はいないと思う層もいれば、一定数、嫁に期待する層もいるなど、嫁という存在やその役割に対する認識は人によって異なっている。こうした異なる認識を接続するために、嫁の役割を明確にしていくことで、現代の嫁役割を明らかにすることができると思う。多様な家族のあり方が模索される今日において、嫁に期待されてきた役割や振る舞いは、今日ではどのように変化しているのだろうか。本報告の目的は、他人である嫁に期待されてきた役割を分節化することで、嫁が担わされてきたジェンダー不平等な状況の解消を目指し、かつ嫁に担わされてきた役割を社会的責任として担うことを議論するための分析視角を検討することである。

本報告では、まず、家族社会学において重要な研究領域である家族意識研究を先行研究として、従来の家族意識について、どのような調査が行われ、どのような分析がなされてきたかを文献調査からまとめていく。家族形態の変化は、父子継承の減少から世代間関係の双系化への変化と大きく捉えられ、同居規範に対する意識の変化やその背景となる要因分析、親子間の援助の状況や日頃のコミュニケーションの回数を調査したものなど、多様な研究の蓄積がある。これらの研究では、家族の実態を捉えるべくさまざまな指標で調査がなされてきた。これまでの家族意識研究を概観することを通じて、どのような指標が家族意識変化として使われ、どのような家族間の関係性を重視した調査がなされ、何が明らかとなってきたのか、整理をおこなう。

また、家族意識研究のなかには、親子の関係性を対象とした研究もあり、嫁と義父母との関係性を捉える上で参考となる研究といえる。岩井・保田(2008)による研究では、経済的援助については父系的規範傾向があるが、50歳以下の女性には援助規範に双系化が見受けられるとする。しかし、これは双系化の可能性も、親側に父系的な規範意識が強い妻側の行動規制が働いている可能性も想定できることから、今後の検証が必要であるとする。このように、嫁の行動は表層的に捉えることが難しく、行動の背景にある家族関係が影響しているといえる。そのため、嫁の役割の変化の実態については必ずしも明確とはいえない。

次に、嫁役割を分析に、家規範の象徴でもあり、且つ変化が乏しいとされてきた葬送・祖先祭祀における嫁役割を分析対象とすることを検討する。冠婚葬祭は、親族の役割が明確化されるが、婚姻(結婚式)よりも、死後(葬儀後)においても継続性がある葬送儀礼は、より役割を捉えやすいと考えられる。また、変化が乏しいとされてきた葬送儀礼は、近年、急激に変化を遂げており高齢社会の文脈で重要な社会課題として認識されている点も、葬送・祖先祭祀に注目する理由である。安藤(2020)は、2000年代以降の変化として従来の家族の形態によらない墓制という今後の変化を指摘する。ここで注目すべきは、墓と墓参りをセットと捉え分析を試み、どのような墓が脱継承の形を取ろうとも死者を埋葬した場所には訪問するだろうとし、死後の関係性について言及している点である。安藤が指摘するように、墓と墓参りはセットで死後も継続して法要されるのが、東アジア諸国に共通する葬送・祖先祭祀の特徴である。嫁は婚家の祖先祭祀を祀り、婚家の墓に入るなど、実家の葬送・祖先祭祀からは遠い距離にいたが、大きな変化が生じている現在、葬送・祖先祭祀における嫁は、どのような役割が期待されているのだろうか。また、安藤の指摘のように墓と墓参りはセットであり、葬送儀礼の形態が変わろうとも、嫁に期待される役割は残るのだろうか。

葬送・祖先祭祀における嫁という視角は、意識の変化ではなく役割の変化を捉える分析視角となると考えられる。

【参考文献】

安藤喜代美 (2020) 「多様化する家族と新しい墓制・葬送のカタチ」『家族社会学研究』32(2), 83-98.

岩井紀子・保田時男 (2008) 「世代間援助における夫側と妻側のバランスについての分析—世代間関係の双系的論に対する実証的アプローチ—」20(2), 34-47.

(キーワード: 嫁役割、葬送・祖先祭祀、家族意識)